

大阪再開発 東西に基軸

写真は日本経済新聞 8月18日朝刊「万博へ 変わる関西 2」から。「森之宮にキャンパス 夢洲で新駅」と、大阪の大規模開発の現状と課題を伝える。関心のあるテーマなので抜粋して紹介したい。

2025年国際博覧会（大阪・関西万博）後を見据え、大阪市内で大規模な街づくりが計画される。1970年万博で整備が進んだキタとミナミを結ぶ南北軸に加え、大阪府・市は人工島・夢洲など臨海部と大阪城東側の森之宮地区を「東西軸」として成長の起爆剤にしたい考えだ。今後は民間をどう巻き込んでいくかに開発計画の成否がかかる。



「市内中心部でこれだけ大学生の集まる拠点は他にない」一。新大学・大阪公立大学の関係者がそう語るのが、同大の新キャンパスを中心に再開発の検討が進む大阪城東部地区だ。府や市が万博を機に発展を目指す東西軸で、森之宮は「西」の夢洲の対となる「東」だ。70年の大阪万博では千里、新大阪から市内の御堂筋沿いにかけての南北軸で開発が進んだ。今後、東西軸として大阪Metro中央線の夢洲への延伸や高速道路「淀川左岸線」などのインフラ整備も進む。

大阪府の吉村知事も SNS で「大阪は御堂筋を中心に南北軸は強いが、加えて東西軸が強くなる」と発信した。森之宮のキャンパスは 25 年 4 月の完成を目指し、速やかに 1.5 期として商業・宿泊施設や JR 大阪城公園駅とを結ぶ動線を設ける。

東西軸では府や市が主導し民間の力も借りつつ発展を目指す。懸念も残る。大阪府が実施した万博の玄関口となる大阪Metro中央線・夢洲新駅の駅前施設と周辺整備の民間公募で、応募した事業者はゼロだった。

万博協会が市へ駅改札と万博会場をつなぐ駅前施設の整備を要請。市は民間事業者の力を借りようと公募に踏み切ったが当てが外れた。公募不調を受け、大阪府は条件を変えて再公募するか公共事業として整備するか検討する。しかし、民間による開発は行政にない知恵を導入できるメリットもあるだけに今後、課題になりそうだ。

なんだか高度成長期の 1970 年大阪万博の頃に戻ったかのようだ。「南北軸」から、今度は「東西軸」へと開発軸を移し、大規模な大阪再開発を推進する。万博という国家イベントによる「お祭り型公共投資」だ。西の夢洲は万博と IR という名のカジノ、東の森之宮は新大学キャンパスが開発の起爆剤となる。これが維新政治による「成長戦略」なるもので、発想が古い。人口減少時代を迎え、コロナ危機という新たな時代の潮流に逆行するものだ。「東西軸」の大規模開発について、これからもチェックしていきたい。

(2021年8月22日)